

# 「推し活」をする中学生が心理的安全性を得られる場の可能性 — 総合的な学習の時間「推しごとゼミ」の実践 —

藤川 大祐<sup>1)</sup> 牧野 太輝<sup>2)</sup> 見館 好隆<sup>3)</sup>

小野 憲史<sup>4)</sup> 小牧 瞳<sup>5)</sup>

千葉大学教育学部<sup>1)</sup> 千葉大学教育学部附属中学校<sup>2)</sup> 北九州市立大学地域戦略研究所<sup>3)</sup>  
東京国際工科専門職大学工科学部<sup>4)</sup> 千葉大学学術研究・イノベーション推進機構<sup>5)</sup>

本稿では、学習者が「オタク」であることを肯定され「オタク力」とされる諸能力を伸ばすことが期待されるようなサンクチュアリ（聖域）としての教室や授業のあり方を明らかにする目的で、「推し」という語の使われ方について検討した上で、中学校の総合的な学習の時間にゼミ形式で全19回の「推しごとゼミ」を実践し、授業中の様子や事後アンケートからこの授業のサンクチュアリとしてのあり方を検討した。まず、「推し」については、「推し活」という語が使われるようになり、「オタク」という語の否定的あるいは自虐的な意味合いが薄まったとともに、「推し」という語の使い勝手の悪さが払拭されたことを確認した。そして、「推しごとゼミ」においては、ゼミの序盤から多様性の尊重が教師や生徒によって繰り返言及され、生徒たちは心理的安全性をもって探究活動ができ、諸能力の伸長が自覚されたことが確認された。<sup>1</sup>

キーワード：オタク、オタク力、サンクチュアリ、推し活、推しごと

## 1. はじめに

企業においても、学校教育においても、「趣味として何らかのことがらに没入することによって獲得／伸長されることが期待される能力であり、他の領域においても活かせると考えられるもの」（渡邊ほか 2021）として定義される「オタク力」を活かすことへの期待がある（見館ほか 2021、小野ほか 2024）。しかし、「オタク」という語は否定的に扱われやすく（藤川ほか 2022）、学校において「オタク力」を伸ばすには困難が伴う。

藤川ほか（2024）では、人が「オタク」になる過程に関する言説をもとに、学校においてはオタクであることが肯定的に受容されるようなサンクチュアリ（聖域）としての教室や授業の必要性が指摘された。そして、2022年度に千葉大学教育学部附属中学校（以下、「附属中学校」とす

る。）で実施された「アイドルゼミ」について報告がなされた。このアイドルゼミにおいては生徒たちは心理的安全性の中で活動することができており、まさに教室がオタクにとってのサンクチュアリとなっていたと考えられる。

しかしながら、藤川ほか（2024）では、実践事例について、授業者である第二著者に対する第一著者によるインタビューのみによって授業実践が報告されたにとどまっており、実際の授業過程が十分に捉えられていない。

そこで本稿では、2024年度に同じ授業者によって実施されることとなった「推しごとゼミ」を取り上げ、授業過程の観察や生徒たちへの調査を行い、こうした授業のサンクチュアリとしての可能性をさらに検討することとした。

本稿ではまず、「推し」あるいは「推し」に関連する語について、特に「オタク」との関係を含め概観する。その後、2024年度の「推しごとゼミ」について、サンクチュアリとしてのあり方を中心に報告及び検討していく。

## 2. 「推し」をめぐって

### 2.1. 「推し」関連の語に関わる経緯

「推し」は名詞であり、「推す」という動詞から派生した語である。「推す」は国語辞典では、「押す」と同語源として、「人や事物を、ある地位・身分にふさわしいものとして、他に薦める。推薦する」等の意味をもつとされる<sup>2</sup>。以下、新聞記事データベース、旧 2ちゃんねる<sup>3</sup>の過去口

Daisuke FUJIKAWA<sup>1)</sup>, Taiki MAKINO<sup>2)</sup>, Yoshitaka MITATE<sup>3)</sup>, Kenji ONO<sup>4)</sup>, and Hitomi KOMAKI<sup>5)</sup>: The Potential of Providing Psychological Safety for Junior High School Students Engaged in "Oshi-Katsu" (Fandom Activities): A Practical Study of the "Oshi-goto Seminar" in Period for Integrated Studies  
Faculty of Education, Chiba University<sup>1)</sup>, Junior High School Attached to Faculty of Education, Chiba University<sup>2)</sup>, Institute for Regional Strategy, The University of Kitakyushu<sup>3)</sup>, International Professional University of Technology in Tokyo, Faculty of Technology<sup>4)</sup>, and Academic Research & Innovation Management Organization, Chiba University<sup>5)</sup>

グ検索<sup>4</sup>、X<sup>5</sup>の検索機能を活用して、これまで「推し」や関連する語がどのように使われてきたのかを見ていこう。

「推す」という語は古くから、選挙あるいは選出で特定の候補者を推薦する文脈で使われてきた。明治時代の新聞記事の見出しには、「日本橋倶楽部楠本氏を推す」<sup>6</sup>、「大日本教育会の総集会 近衛公爵を会長に推す」<sup>7</sup>と、候補者を推薦する意味で「推す」が使われているものが見られる。

1990年代になると、新聞記事に「いち推し」あるいは「イチ推し」という表現が見られるようになる。「夏休みにいち推しの遊び場です！」<sup>8</sup>等だ。「いち推し」／「イチ推し」は、強く推薦するということをやや砕けた雰囲気表現する語として使われている。

2ちゃんねるの過去ログでは、2001年の段階で「一推しのメンバー」、「事務所推し」といった表現が、2002年には「推しメン」、「2推しを告る」と言う表現が、2006年には「藤本<sup>9</sup>推しを辞めた」、2007年には「お前等の推しを教えて」という表現が確認できる。これらは基本的にハロー！プロジェクト<sup>10</sup>所属グループについて言われているものであり、「推し」関連の表現は、古くは事務所がメンバーを強く押し出していることと、ファンが特定のメンバーを一推しとして応援していることについて使われていた。その後、特定のメンバーを応援していることやその人が「～推し」の形で言われるようになり、「推しメン」の省略形として「推し」という表現が使われるようになった。

Xの検索では2007年<sup>11</sup>に「アイマス<sup>12</sup>やる前とあとで一番推し度が上がったのは伊織<sup>13</sup>だなあ」等の表現が、2008年には「大島優子<sup>14</sup>推し」、「僕の推しはシンディ<sup>15</sup>です」とAKB48<sup>16</sup>関連の投稿での表現が見られ始め、ハロー！プロジェクト以外でも「推し」関連の表現が見られるようになる。他方、「℃-ute<sup>17</sup>のバスツアー2万円振り込んできた！今日は推し事忙しい」のように、「推し事」という表現も確認できる。他方、当時のジャニーズ事務所所属の男性アイドルグループに関しては、応援対象のメンバーを「自担」と呼ぶことが多く、Xの検索でも2007年段階で「今日は自担の誕生日」、「自担を目に焼き付けたい」といった表現を確認できる。2010年になって、「ジャニ<sup>18</sup>の推し」、「相葉<sup>19</sup>推し」というように、「推し」という言葉が使われ始めたことが確認できる。

アイドル以外に関して、Xの検索では2009年に「ヤクルト推し」、「推しは中日」といった野球に関するもの、「Bruno Mixte 推し」のような自転車のブランドに関するもの、「アップル推し」のようなコンピュータメーカーに関するもの等が見られる。

新聞記事では、2011年に「推し」という表現がアイドル関係の文脈で使われるようになった。いずれも、AKB48に関する記事で「推しメン」という語が使われたものである。「ファンは、『推しメン』（自分が応援するメンバー）の選抜メンバー入りの夢を自分の夢としてかなえるため

に、CDを買い、投票する」<sup>20</sup>という表現が見られる。この頃は、「推しメン」という語には説明が付けられており、この語が一般には浸透していないと考えられていたとわかる。2011年には「AKB48 22nd シングル 選抜総選挙」<sup>21</sup>が話題になり注目されたことから、「ユーキャン新語・流行語対象」でも「推しメン」がノミネートされた。

Xでの検索では、「推し活」という表現が2017年から少しずつ見られるようになる。「自分は推し活というより孫活だから」、「推し活の費用」、「結局『推し活』なんてものは」といった表現が確認できる。

新聞記事では、2019年の朝日新聞の記事<sup>22</sup>中に「推し活お守り」というものへの言及が見られる。2021年には読売新聞で「推し活のススメ」という連載<sup>23</sup>が組まれた。「推し活」は2021年の「ユーキャン新語・流行語大賞」にノミネートされている。

以上を踏まえると、「推し」に関する表現に関する経緯は次のようなものだった。少なくとも明治時代には、「推す」という動詞が選挙等の文脈で使われてきた。そして、1990年代に「いち推し」あるいは「イチ推し」といった名詞表現が使われるようになった。その後、遅くとも2002年までに女性アイドルグループに関して、応援の対象となっているメンバーが「推しメン」と呼ばれるようになり<sup>24</sup>、その後、「推しメン」の代わりに「推し」という言い方も使われるようになった。2008年には「推し事」という表現も使われ始め、2009年にはアイドル以外の領域でも「推し」という言い方が使われ始めた。2011年に「推しメン」が広く知られるようになり、2021年くらいに「推し活」が広く使われるようになった。

## 2.2. 「推し」の意味論的分析

「推し」の元の動詞である「推す」は、「押す」と同音でもあり、誰か候補者を当選等へと強く前に（上に）押すという意味合いをもつ。「アイドルを推す」という場合には、そのアイドルを強く売り出す／他の人に推薦する、AKB48の選抜総選挙のような場で上位に入れようと運動するといった意味合いになる。

動詞「推す」の活用は五段活用であり、連用形に「推し」という形がある。名詞「推し」は動詞「推す」の連用形「推し」が名詞化したものである。

動詞の連用形が名詞化して安定して使われるようになることは、珍しくない。このことについては沈（2013）に詳しく、「動き」、「遊び」、「扱い」、「悩み」、「嗜み」、「受け入れ」、「立ち読み」といった例があるが、「打ち」や「隠れ」のように連用形と同じ形の名詞が基本的に見られない場合もある。また、「彼は走りは速い」とは言っても「走りは体に良い」とはあまり言わない、あるいは「集め」と単独では使わなくても「資金集め」とは言うといったように、特定の形式でしか使われない表現も見られる。

沈 (2013) が示している例では、基本的に名詞化した後の名詞は、動詞が表す動作や作用を意味している。「動き」は「動くこと」、「遊び」は「遊ぶこと」を意味している。「押し」については、「押し度」は推す度合い、「押し活」は推す活動であるので、これら複合語として使われる場合に「押し」は推すという動作・作用を意味する。しかし、「押し」は単独では、「推すこと」でなく「押しメン」すなわち推す対象のことを意味する。「押しは中日」のように推す対象がメンバーでなくても「押し」が使われることがあり、「押し」は「押しメン」に限らず推す対象をも指す。さらに、「大島優子押し」等、「～押し」形式の複合語では、「押し」は推す動作・作用の主体を指すようになった<sup>25</sup>。

西尾 (2004) が論じているように、動詞の連用形から派生した名詞は、動作・作用を意味する以外に、動作・作用に密接に関係する内容に語が転用される換喩となっている場合がある。具体的には、「考え」や「教え」のように動作・作用の内容が表される場合、「滑り」や「売れ行き」のように動作・作用の有り様等が表される場合、「包み」や「余り」のように動作・作用の所産・結果が表される場合、「見習い」や「流れ」のように動作・作用の主体が表される場合、「つまみ」や「差入れ」のように動作・作用の客体が表される場合等がある。応援する対象としての「押し」は、動作・作用の客体が表される場合に該当する。

このように、「押し」は、単独あるいは「押しメン」等の形では基本的に「推す」という動作・作用の対象を意味し、「～押し」という言い方の場合には動作・作用の主体を意味する。そして、他の形の複合語の場合には、基本的に「推す」という動作・作用を意味する。こうしたことは混乱を生じさせる。たとえば、Aさんが大島優子さんを推しているとき、「(Aさんの) 押し」に該当するのは大島優子さんだが、「大島優子押し」に該当するのはAさんであり、「押し」がどちらを指すのかわかりにくい。このことは、「押し」という表現がアイドルファンには使いやすくて、他の者には使いにくいことを意味する。言い換えれば、「押し」はアイドルファン等のコミュニティ内でないと通じにくい語となっており、隠語に近いものと言える。

江藤ほか (2002) が医療従事者のドイツ語隠語に関して明らかにしているように、隠語には部外者を排除し、そのことによって内部の者のアイデンティティを確認したり集団への帰属意識や連帯感を高めたりする機能がある。「押し」という表現は、一部のコミュニティにおける隠語に近いものとして機能し、外部の者にはそうしたコミュニティの排他性を印象付けるものであった可能性がある。

他方、2021年ごろから広く使われるようになった「押し活」という語は「推す活動」を意味することが明白であり、隠語とはなりにくいと考えられる。また、「押し活」より以前から一部で使われていた「押しごと」(押し事)という語は、耳で聞くと「お仕事」との区別がつかないが、

文字では「推す仕事」のことだという理解がなされやすく、少なくとも文字で見る限り隠語のようにはなりにくい。

### 2.3. 「押し」と「オタク」

「押し」と「オタク」との関係について見ていこう。

「押し」や「押しメン」を応援対象のアイドルグループのメンバーという意味で使っていたのは、アイドルファンたちであった。こうした人たちは、自分たちのことを「オタク」あるいは「オタ」と呼ぶ(表記は「ヲタク」、「ヲタ」の場合もある)。Xで検索しても、「どちらもAKBオタ。ゆきりん押しチュウ押し<sup>26</sup>」、「ドルヲタ<sup>27</sup>は押し変するもんだけど」といった表現が2011年に見られる。すなわち、アイドルに関する文脈においては、特定のメンバーを推している「～押し」の人は、「オタク」と呼ばれていた。

藤川ほか (2022) で検討されているように、「オタク(おたく)」という語は、相手あるいは第三者の家の敬称から、二人称代名詞としての意味を経て、二重の換喩によってある種のマニアを意味するようになった。この語にはマニアの意味で用いられはじめた頃から、否定的な意味合いが付与されており、オタクを自認する者たちも自嘲的にこの語を使ってきた。このため、「オタク」と関連する「押し」という表現も、否定的あるいは自虐的な意味合いが感じられるものであったと考えられる。

しかし、その後、一般人にとっての「押し」の印象の改善は進んだと考えられる。これは、「オタク」の印象の改善が進んだことと、「押し」の主体となる人が「オタク」に限定されなくなったことの二つによると推察される。

大石 (2023) は、「オタクイメージの回復」の要因として、日本国内においてオタク文化に含まれるアニメーションやマンガが認められるようになったこと、海外において日本のアニメーションが認められたこと、「オタク」が一般に浸透したことの3点を挙げている。こうした要因によって「オタク」の印象が改善されているため、「押し」の印象も改善されていると言える。

また、「押し」の対象となるカテゴリーは、アイドル以外に、アニメーション・漫画・ゲームのキャラクター、バンドやミュージシャン、俳優やタレント、YouTuberやVTuber<sup>28</sup>、アニメ・漫画・小説等の作品、マスコットキャラクター、歌手<sup>29</sup>、スポーツ選手やチーム、お笑い芸人、企業やブランド、動物、乗り物、建築物・場所、身近な人等、多岐にわたる<sup>30</sup>。企業やブランド、動物等を「押し」としている場合、その人は「オタク」とは呼ばれにくい。

こうして「押し」についての一般人にとっての印象が改善されたことと、2021年に「押し活」という語が広がったこととは、無関係ではないだろう。「押し」という語の使い勝手はよくないが、「押し」をもつ人は増え、推すという行為についてのわかりやすい表現が潜在的に求められていたと考えられる。そうした中で、わかりやすい「推

し活」という表現の使用が広がったものと思われる。

「推し活」は「推し」に1文字加えただけの表現だが、「推し」より格段に使い勝手がよい表現と考えられる。近年、「就活」、「婚活」をはじめ、「終活」、「保活」等、「～の活動」を意味する「～活」という表現は多い。「推し活」のように動詞の連用形に「活」がつく形の表現はあまり見られないが、「推し活」と聞けば「推す活動」のことだという理解は得られやすい。この場合の「推し」はあくまでも「推す」という動作・作用であり、動作・作用の主体や客体等の換喩ではない。こうしたことから、「推し活」という語は「推し」より格段に使い勝手がよく、使用が広がったものと考えられる。

### 3. 「推しごとゼミ」の実践

#### 3.1. 「推しごとゼミ」の計画等

以上の「推し」等に関する検討を踏まえ、ここからは「推しごとゼミ」の実践について述べる。

藤川ほか(2024)でも説明されているように、附属中学校では、総合的な学習の時間の多くを、「附中探Q記」という名称の下、全学年合同で、ゼミ形式で実施している。「附中探Q記」は毎年度6月ごろから12月ごろの約半年間、原則として毎週水曜日の14時30分から15時40分の70分授業で実施される。

「推しごとゼミ」は、国語科担当である第二著者(牧野)が自ら提案して開講したものであり、本研究との関係で第一著者(藤川)も授業担当者に加わっている。ゼミの概要は表1の通りである(オリエンテーション資料より)。

各回の授業の概要は表2の通りである。全19回の授業のうち、第7回の9月18日は附属中学校全体で探究校外

学習を行う日となっており、1時間目から6時間目をすべて使ってゼミごとに原則として校外で学習を行うこととなっている。また、第18回の11月30日は土曜日で、終日、全校での探究発表会が設定されており、全校生徒に加え、生徒の保護者も見学・聴講に参加する。なお、計画では各回の主な内容に加えて、第2回の6月19日から第11回の10月16日(探究校外学習の9月18日を除く)には、授業の冒頭に「マイ『推しごと』紹介」という「帯コーナー」が設けられており、各回2~3名が自らの「推しごと」について数分間でプレゼンテーションする。

「附中探Q記」のオリエンテーション後に全校生徒が参加したいゼミの希望を出した結果、「推しごとゼミ」は希望者が定員を上回り、調整を経て、3年生15名、2年生10名の計25名が「推しごとゼミ」に参加することとなった。うち、男子は3名(2年生1名、3年生2名)、女子は22名であった。

各回の様子については、第一著者が可能な範囲でビデオ撮影を行い、必要に応じて録音した。資料の配布や課題の提出等は基本的にGoogle Classroomを通して行われた。

最終回となる第19回の中で、生徒にはGoogle Formsを利用した事後アンケート調査を実施した。

本実践における生徒に対する倫理上の配慮は次の通りである。附属中学校においては、入学時に生徒及び保護者から研究への協力について包括的な同意がとられている。本授業の実施に際しては、初回の授業で第一著者から生徒たちに研究への協力をあらためて求めるとともに、疑問や不都合があれば申し出てもらうよう話した。また、第19回のアンケート調査においては、あらためて回答は任意であり、回答の内容や回答の有無が成績等の不利益には関わらないことを説明した。生徒及び保護者からは特に申し出

表1 推しごとゼミの概要

「推しごと」ゼミ			主に探究対象とする世界	
担当者	主な活動場所	定員	社会心理学、コミュニケーション、経済、情報	
牧野・藤川 2A教室 25名				
【ゼミの概要】 皆さん、推していますか？ そうですね、私達は推しがいるから今日も元気に生きられます。ありがとう。 このゼミでは「推す」という行為を通して世界を見つめ、各自の視点を定めて「推す」ことについて探究します。最終的にはゼミ全体で「推しごと」の素晴らしさを伝える本を発行する予定です。中学生の皆さんだからこそ語れる「推しごと」の魅力を世界に発信していきましょう。				
【予定している主な活動】 【インプット】「推しごと」を取り巻く様々な領域を<観る・知る・探る> 「推す」の定義/「推しごと」の効能/「推しごと」とコミュニケーション/「推しごと」コミュニティ/「推しごと」グッズ/「推しごと」経済市場/「推しごと」情報の扱い方/「推しごと」の終わり/「推しごと」と「お仕事」/ワールドワイド「推しごと」 【アウトプット】「推しごと」を取り巻く様々な領域を<知る・探る・創る> マイ「推しごと」紹介(自分がどのように推しているかを紹介する)/「推しごと」用語辞典/「推しごと」についての個人・グループ研究/「推しごと」本の発行			【こんな人たちが待っています】 ・「推し」がいる人 ・「推し」という言い方はしないが、何かを熱狂的に応援したり愛好したりしている人 ・「推し」がいる人を応援したい人、肯定する人 ※このゼミでは「推すこと」自体を研究対象としています。「アイドル」や「鉄道」など推す対象そのものを研究するわけではないことに注意してください	
【発表会の見通し】 ・ゼミ全体で「推しごと」の素晴らしさを伝える本を発行する。 ・発表会では出版する本の内容を分担して個人またはグループで紹介する。				
【その他】 ゼミ担当者の「守備範囲」は以下の通りです。<だいが話せる>、<話に乗れる>領域については、「まあまあ知っている人」の視点でアドバイスできます。逆に<守備範囲外>領域については「知らない人」として色々話を聞かせてほしいなと思います。 <だいが話せる>アイドル、お笑い、音楽、ディズニープリンセス、ジブリ <話に乗れる>声優、VTuber、近代文学、漫画、アニメ、ゲーム、映画、水族館 <守備範囲外>スポーツ全般、鉄道、車、美容、宝塚、ミニチュア、プラモデル、城				

表2 推しごとゼミ 各回の内容

回数	日付	主な内容
1	5月29日	オリエンテーション 「推す」の定義① (自分を例に)
2	6月19日	「推す」の定義② (コーパス)
3	6月26日	「推しごと」用語辞典
4	7月10日	「推しごと」の効能 (推すことによって心理状況はどのように変化するのか)
5	9月4日	「推しごと」読書共有
6	9月11日	校外学習準備
7	9月18日	「推しごと」現場訪問 (探究校外学習)
8	9月25日	校外学習報告会
9	10月2日	「推しごと」の終わり
10	10月9日	「推しごと」のコミュニケーション①
11	10月16日	「推しごと」のコミュニケーション②
12	10月23日	マイ「推しごと」紹介原稿執筆
13	10月30日	個人・グループ研究①
14	11月6日	個人・グループ研究②
15	11月13日	中間発表会
16	11月20日	個人・グループ研究③
17	11月27日	発表会リハーサル
18	11月30日	探究発表会
19	12月4日	振り返り

はなく全員の協力が得られた。

### 3.2. 心理的安全性構築の過程

「推しごとゼミ」が推し活をしている生徒たちにとってサンクチュアリとなるためには、各生徒がチーム内で自由に意見を述べたり、個人的なことがらをさらけ出したりしても、否定や攻撃を受けることなく受け入れられるという心理的安全性 (Edmondson & Lei 2014) が必要だと考えられる。以下、この授業の前半から、心理的安全性構築に寄与していると考えられる場面のいくつかを抽出し、構築の過程をたどってみたい。なお、第二著者 (牧野) を「授業者」、第一著者 (藤川) を「記録者」と記す。授業の序盤の第1回、第2回、第5回<sup>31)</sup>の様子から、心理的安全性の構築がどのように進められたかを見ていく。

#### 3.2.1. 第1回 (5月29日)

第1回の授業の冒頭で、記録者が自己紹介を行い、授業者が授業の概要を説明した。記録者からは、自分は千葉大学教育学部の教授であり、附属学校の元校長であること<sup>32)</sup>、「オタク力」についての研究を他大学の先生たちと一緒にに行っていること、2年前の「アイドルゼミ」について授業者にインタビューして論文を書いたこと、自分自身は中学生の頃からアイドルオタクやヒットチャートオタクをしてきたこと等を話した。授業者からは、まず自らについて「基本的にアイドルを推していますが、それ以外の部分でもちょっとオタク的な活動をしている部分もあるので、わ

りと浅く広くタイプのおタクなので、その辺で役に立てる部分もあるのかなと思ったりします」という話があった。

続いて、授業者から授業の概要として、「(このゼミでは)『推す』という行為自体に着目します。ですので、その過程で『推し』というものが何なのかにも着目することもあるでしょうし、自分の推し方というものはそのまま研究の材料になるし、あるいはここに参加している他の人たちの『推す』という行為も参考になります」という話があり、その後、ゼミの計画についての説明がなされた。ゼミの計画としては、全体が「インプット<観る・知る・語る>」と「アウトプット<知る・探る・創る>」から成ることが示され、「インプット」については活動例、「アウトプット」については活動内容が示された。この中で、授業者が次のように話している。

「同担拒否<sup>33)</sup>って言葉ありますね。申し訳ないですけど、この推しごとゼミの中で同担拒否だけはやめてもらいます。同担拒否が起ると喧嘩が起るから。」  
 「(「推しごと」についての情報の扱いについて) 国語の授業でやるより、絶対推し活動のときに情報活用能力が高くなって思って (略) 絶対こっちの方が熱量があって、そして上手いということです」

さらに、授業者は「注意事項」として次のように話した。

「参加者が安心して推しを探究するために、他の人の推しを探究するために、推しの内容を教えてください。 (略) それちょっと自分的には受け入れられないみたいな推す対象もありうるかなと思って。それを否定はしないでほしい。そこに対する違和感とか、そこに対するこれってどうなのかとかは言っていないような気がするんですね。 (略) たとえばアイドルを推していると、中学生を教えている教員ですよ、その教員がアイドルを推すということはどうなのかって思われてるなって思っています。  
 (略) 疑問をもつのはいいし、それをキモいって言うとか否定になっちゃうよね。でも、その部分で先生はどういうふうな折り合いをつけてるんですかってきくことは絶対いいと思いますよ。 (略) 否定はされない方がみんなが安心して参加しやすいんじゃないかなって思ったりはします」

第1回の授業では、この後、生徒たちが少人数のグループに分かれて、自分の「推しごと」を中心に自己紹介をした。そして最後に全体に対して、授業者が自分の「推しごと」についてかなり詳しく自己紹介をした。

以上のように、第1回の授業の冒頭で、授業者及び記録者は自らが「推しごと」をしていることについて開示した。

そして、授業者は、互いの推し活を否定しないでほしいこと、しかし疑問をもって質問することは問題ないこと、また「推しごと」について探究することが情報活用能力の発揮において期待できること等について述べている。このような自己開示、個々の違いの尊重、安心して発言できること、活動への期待等が授業者側から示されたことは、ゼミにおける心理的安全性の構築に寄与するものと考えられる。生徒たちの少人数での自己紹介においても、自分の「推し」について個々の生徒が丁寧に説明し、他の生徒が関心をもって聴いている様子が見られた。

### 3.2.2. 第2回（6月19日）

第2回の授業では急遽授業者（第二著者）が不在となり、授業の進行は附属中学校の別の教員が担当することとなった。第一著者はほぼ撮影・録音のみを担当する記録者として授業に参加した。この回では、全体での授業が冒頭の「マイ『推しごと』紹介」のみであったので、この様子を見よう。この日は、予定通り3名の生徒が「マイ『推しごと』紹介」としてプレゼンテーションを行った。進行も、生徒が輪番で行っている。なお、「マイ『推しごと』紹介」の発表日程は、生徒の希望をもとに決められている。第2回授業で発表することになった生徒には、授業者が第1回授業直後に、簡単に発表の仕方について説明していた。第2回発表者のうち3年生のAさんとCさんは1年生のときにアイドルゼミに参加していた。

1人目の発表者はAさん（3年生女子）であった。Aさんは、K-POPアイドルを推す活動について発表した。SNSの「オタ垢」<sup>34</sup>を使った交流、「現場」<sup>35</sup>や「聖地巡礼」<sup>36</sup>での経験、自作グッズのこと等を具体的に説明した。基本的に推し活の楽しさを具体的に伝える内容となっており、語り口は次のようであった（「現場」のことについて語っている部分）。

「次に、（スライドに）めっちゃ写真貼ってあると思うんですけど、現場です。私の中でいちばんアイドルオタクして楽しいなって思う瞬間がこの現場の瞬間で、自分の好きな人を生で見て、自分の好きな音楽を生身で感じるっていう、この瞬間が私は本当にいちばん大好きで」

Aさんの発表については、発表中にあった「ソナムル交換」<sup>37</sup>とは何か、推しは誰かといった質問が出された。

2人目の発表者はBさん（2年生女子）で、「原神」<sup>38</sup>、「僕のヒーローアカデミア」<sup>39</sup>、「名探偵コナン」<sup>40</sup>といった2次元<sup>41</sup>作品におけるキャラクターを推す活動について発表した。「自分の推しごとを紹介するのが初めてなんで、ゆるーく見てってください」と前置きをし、Bさんはグッズを買う、推しの誕生日を祝う、絵を描く、四六時中グ

ッズを持ち歩く、推しのボイスを聞くといったことを行っているとし、個々の活動について早口でまくしたてるようにして、具体的に説明した。その後、推しているキャラクターやグッズの写真等を見せた。たとえば、グッズについては次のように話していた。

「グッズを買うというのはみんなやっているじゃないですか。たとえば、アクリルキーホルダーとかアクスタ<sup>42</sup>とかそういうものを買って。（略）四六時中グッズを持ち歩くというのは、私という、その、推しているじゃないですか、その推しをいつももちあるくことによって、よくあるじゃないですか神社でお守りとか、それより素晴らしいお守りになるんです」

Bさんについては、どういう場所でグッズを買うか、推しが別次元にいる<sup>43</sup>と安心するののだがどうかといった質問が出された。

3人目の発表者はCさん（3年生女子）で、アニメーションを推すことと歌手手を推すことをグッズに着目して比較した内容の発表を行った。Cさんはまず、「～という人がいる」、「～という人が多い」という話をするが、いちいち断らないので怒らないでほしい、そしてけっこう私見を話すという断りを入れた。アニメーションについては、アニメイト<sup>44</sup>や通販で少しずつ買っている人が多く、グッズは飾らずに収納している人が多いと述べた。そして、歌手手については、基本的に通販で買い、アニメイトで買う人もいて、缶バッジ100個のように大量に買う人が多いと述べた。また、歌手手については、「痛バ」<sup>45</sup>を組んでいる人が多く、「全主張、全面アピール」のような形で部屋にそれを飾っていると述べた。Cさんは、買う量もアピールも、アニメーションの場合より歌手手の場合の方が多いことについて、歌手手の場合には対象が実在しているため、本人へのアピールになるためではないかと述べている。

Cさんに対しては生徒から質問が出ず、授業者の代理の教員が1回どれくらいお金を使うかを質問した。

以上のように、「マイ『推しごと』紹介」では、このコーナーが初めてであり授業者が不在であったにもかかわらず、3名の発表者は自分の推し活について楽しそうに、あるいは夢中になって、具体的な内容を話していた。この3名の生徒が互いの多様性を尊重しつつ自分の推し活について堂々と発表したことで、他の生徒たちも自分の推し活について話すことへの不安が軽減されたと推測される。

### 3.2.3. 第5回（9月4日）

この回についても、「マイ『推しごと』紹介」のコーナーを見たい。Dさん（2年生男子）の発表の後の質疑応答では、次のようなやりとりがあった。

Bさん(2年生女子、第2回発表者の一人)「自分でグッズを作ったりしますか？」

Dさん「いやあなんかすごい個人的な感じなんですけど、自分でグッズを作ったりすると、なんか本家様に失礼な感じがして、ちょっと自分で作ったりはしてません」

Bさん「はあ、なるほど」

授業者「作る人もいるから。わかるよ。わかるよ。わりとこっちの人たち(グッズを作っている人たち)、作ってる人、どうですか。グッズを作ることは失礼になるんですか？」

Bさん「別に、それは人によって違うからいいんじゃないかって。でも、自分で作るっていうメリットは、自分の好きな写真とか立ち位置で、自分の好きな(聞き取れず)のでできるから、市販じゃない、愛を込めて作れるっていう素晴らしさがあると思うんですよ」  
授業者「そうだね」

Dさん「なんか自分の中の推しのイメージを自分によって壊したくないっていうのはちょっとあります」  
授業者「それもわかるよ。そういうオタクもいるよ」

また、Eさん(3年生女子)は、インターネットでの情報収集を中心とした推し活について発表した。まず、スライドで次のように示した。

#### 活動

- ・曲を聞く
- ・二次創作を見る
- ・絵を描く
- ・ゲームをする
- ×配信を聞く
- ×グッズ集め
- ×現場に行く

そして、次のように話した。

「活動はこんな感じですけど、ここの×って書いてあるところ、やってないんですけどやりたくないわけじゃなくて、時間がない、時間がないっていうのじゃなくて、配信聞くのが、その、それよりは小説を読みたくて思っちゃって、やってなくて、グッズ集めも、金欠でできなくて、友達がくれるのが本当ありがたい、それにすがって生きてます。『現場に行く』は、自分で出不精すぎて、行きたくないんですよ、本当に。なんか、行ったら楽しいんだろうなと思うんですけど、その間の電車とか、あと、行ったときに人混みすごいじゃないですか。それがちょっと、ちょっとなあと思って、あんまり、あんまりっていうか、全く

行ったことないです」

これに対して、授業者は「私も在宅<sup>46</sup>なので、わりと。在宅の同志の意見を聞きたいです」と言い、在宅で推し活をする生徒に発言を促した。その後は現地に行く生徒にも発言を促した。

以上のように、第5回の授業では、グッズを作るか否か、あるいは現地に行くか在宅かといった推し活のあり方の違いが話題になった。各点について授業者が介入し、それぞれのあり方を尊重しつつ発言を促していた。

ここまで見たように、「推しごとゼミ」においては、授業者が、互いの違いを前提に、それぞれの推しや推し活を尊重する方向で繰り返し発言していた。他方で、授業者がいなかった第2回においても、発表した生徒たちは、互いの多様性を尊重しつつ自分の推し活について堂々と発表していた。その後も生徒たちには互いに敵対するような様子は一切見られず、違いを尊重しながら活動を続けていた。「推しごとゼミ」は、推し活について探究したい生徒が集まったゼミということもあり、始まった時点においてすでにある程度は、生徒たちが安心して自分の推し活について話せる場となっていたと考えられる。そして、序盤の授業において、授業者も生徒たちも互いの違いを尊重した発言を続けていたことから、この場が心理的安全性が確保されたサントクチュアリとして構築されていったと解される。

廣瀬(2022)は、オタクのコミュニティについて、利己主義と排他主義が生じやすく、サントクチュアリとなりにくいことを論じている。具体的には、「にわかオタク」などに対して高圧的な態度をとる「他者排他」、同じ対象を好きな人に敵対意識をもつ「同担拒否」、熱心さを消費量やオタク歴で測る「マウンティング」といった非友好的な行動がオタクのコミュニティには見られると指摘している。

「推しごとゼミ」においては、第1回で授業者が明確に同担拒否をしないよう述べていることをはじめ、授業者も生徒たちも「他者排他」や「マウンティング」を避けるべく、意識的に多様性を尊重した態度をとっている。廣瀬の言う利己主義や排他主義を意識的に抑えることが、推し活を進める者が集う場がサントクチュアリとなるために重要だと考えられる。

### 3.3. 探究発表会での発表について

「推しごとゼミ」では、生徒たちが「推しごと」についての検討を進め、やがて個人あるいは少人数で探究テーマを決め、探究活動を進めていった。第18回にあたる11月30日には、各個人あるいはグループで、口頭もしくはポスター形式で探究活動の成果を発表した。各生徒の発表テーマは以下の通りであった(原文のまま)。

- ・布教<sup>47</sup>のすゝめー布教を布教するー

- ・推しごとの心理とそれによる行動
- ・オタクのパワーとは
- ・ヲタクのイメージ
- ・界限<sup>48</sup>ごとのグッズの特徴から今後流行りそうなグッズを考える
- ・2次元と2.5次元と3次元の推し事の違い
- ・推しと心理
- ・「推し」と「好き」の違い
- ・推し事の違い～新しい推し活グッズの考案～
- ・推し活をする人とそうでない人のコミュニケーション
- ・次元や年齢による推し方の違い
- ・推し事と宗教
- ・歌い手界限とインターネット
- ・推しに対する感情
- ・オタクへの接し方“同担・ガチ恋”<sup>49</sup>

それぞれ、文献やアンケート調査に基づいた発表がなされた。口頭発表では、原稿棒読みのような発表は見られず、自らの思いを込めて話している様子が見られた。参加者からの質問にも、円滑に回答する様子が見られた。

たとえば、「界限ごとのグッズの特徴から今後流行りそうなグッズを考える」は2名による口頭発表であり、K-POP、旧ジャニーズ、2.5次元、ディズニー、アニメーションといった多様な界限で人気のあるグッズを確認したり、推しごとゼミ参加者にグッズに関するアンケートをとったりした上で、今後、トレカ<sup>50</sup>やミニペンライト<sup>51</sup>といったグッズが流行るのではないかと結論を出した。

### 3.4. 事後アンケートについて

#### 3.4.1. 事後アンケートの結果

第19回において実施した事後アンケートの結果は表3から表10の通りである。なお、推しごとゼミ参加生徒全員の25名から回答を得られた。各表の数字は人数である。

表3 推しているジャンル（複数回答可）

アニメ/漫画17名、アイドル（海外）11名、VTuber/配信者11名、音楽アーティスト（国内）10名、キャラクター/マスコット9名、アイドル（国内）8名、ゲーム/eスポーツ8名、音楽アーティスト（2.5次元）6名、音楽アーティスト（海外）3名、文学・作家2名、スポーツ選手/チーム1名、舞台/ミュージカル（3次元）1名、舞台・ミュージカル（2.5次元）1名、特になし0名、その他3名（歌い手2名、俳優1名）
--

表4 推しごとゼミの印象（心理的安全性関連）

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
自分の推しについて自由に話せる	20	5	0	0
他の生徒や先生が自分の意見や感情を尊重してくれる	23	2	0	0
自分が安心して参加できる場所だと思う	21	4	0	0

表5 推しごとゼミで能力が伸びたか

	非常に伸びた	やや伸びた	あまり伸びていない	全く伸びていない
情報収集能力	10	12	2	1
分析力	13	11	1	0
表現力	13	12	0	0
コミュニケーション能力	12	11	2	0
創造力	11	12	2	0

表6 推しごとゼミによる変化

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
これまで意識していなかった自分の強みや能力に気づいた	11	12	2	0
学んだことや伸びたと感じた能力を、日常生活や他の授業で活かした	12	11	2	0
ゼミで得た能力を今後どのように活かしたいか（自由記述、要約して示す）	（学習に関して）周囲に伝えるとき、レポートや情報収集で、仕事を効率的に進めたり勉強面で助け合ったりするとき、規則を探したり分析したり、手早い情報収集、行事の話し合いで相違点や本質を見つけて新しいものを作ったり選択肢を広げたい、話し合いで根拠を明確に伝えたり良い部分を取り出す、自分ありの考えをもって正確に伝える、グラフや情報から分析する、話す関連のことで、議論で一方的に話さない、発表で簡潔に伝える、最大限に魅力を伝えられるよう情報を整理する、面接で考え方を表現する、記述の試験問題等で、レポートを作成する機会に情報収集や考察や結論の導き出し方などを（自分の推し活に関して）オタクはいい人と説明したい、好きなどころを見つけない、自分の界限の推しのグッズを作りたい、布教で、SNSでオタク同士でコミュニケーションをとるとき、SNSで著作権を意識したり言い回しを工夫したりする			

表 7 日常生活の状況

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
日常の学級の生活で、自分の推し活について自由に話せると感じる	9	12	4	0
家庭で、自分の推し活について自由に話せると感じる	12	7	3	3
日常の学級授業や家庭で、自分の推し活を周囲の人に理解してもらえると感じる	11	9	5	0

表 8 オタク活動や推し活について周囲の人から否定的な言葉を受けた経験

	よくある	たまにある	ほとんどない	全くない
経験の有無	2	9	7	7
主に誰からか(複数回答可)	同級生(仲の良い友人以外)9名、保護者7名、仲の良い友人4名、教師0名、その他1名(部活の先輩)			
否定的な言葉の影響(自由記述、要約して示す)	(もっと推す)推しをもっと有名にさせようと思った、一途に生きようと思った、推しに対する愛が深まった (気にしない)聞き流した、特に影響はない気がするが誰にでも話していいものではないかもと学んだ、気に留めない、影響はなかったが距離感や感想の伝え方には気をつけようと思った、どう思われてもいいやと思っていたので影響はなかった、影響を与えていない (気にした)推し活を活発にするのはやめようと思った、距離を置くようになった、陰口に近い感じだったのでバカにしてんのかと思った、なんか3次元の方が上という風潮みたいなものがあるのかと思った、あまり人に言わないようにしようと思った、自分が好きな作品を全く受け入れられない人もいるんだと感じた			

表 9 ゼミ全体で最も印象に残ったこと(自由記述、要約して示す)

マイ推しごと紹介(6名)、校外学習でいろいろな場所に行きグッズを見た等(5名)、他の界限に興味を持った(2名)、オタク用語を集めたこと(2名)、推しごとの終わりについて考えたこと(2名)、推すということについて考えさせられた(2名)、次元の間の差、自分の推し活での理念が固まった、協力して話せた、界限によって用語やテンション感が違ったこと、発表の準備でどのようにしたら伝わるかを考えたこと、自分の推しについて共感を得られたこと、好きなことを熱く語り合える仲間がたくさんいると知れたこと
--

表 10 ゼミを通じて自分の考え方や活動にどのような変化があったか(自由記述、要約して示す)

他の界限もいいと思うようになった(3名)、それぞれの違いがあつていいと感じた(2名)、布教のときの配慮について考えるようになった(2名)、他界限のやり方を取り入れて楽しみたいと感じた、推し活にさらに時間をかけるようになった、オタクは国に貢献していると感じた、探究心が上がった、こういう人もいるという考えが深まった、よりいろいろな対象にはまるようになった、マイ推しごと紹介で紹介された方法を真似したいと思った、部屋のグッズのレイアウトを変えた、他の人の考えを意識するようになった、同じ界限の人でも価値観や考え方が異なっていて自分の考えも変化した、推し活は思い切りやっつけていいんだと思った、自分の推し活に意味を持たせたいと思った、推し方について強火すぎも良くないのかなと思った、他のヲタクの人に過剰にならなくなった、推しが広く浅いことについて自分を安定させるにはいいのかなと思った、自分を深く知ることにつながった、そこまで他人の目を意識する必要はないのかなと思った
---

### 3.4.2. 事後アンケートについての概括

参加生徒が推しているジャンルは多様であったが、生徒たちは全員が心理的安全性について肯定的な印象をもってゼミに参加することができていたようである。ほとんどの生徒が、「推しごと」に関する探究的な学習を行ったことを通して多様な能力が伸びたと感じている。そして、学んだことは、日常の学習や自らの推し活である程度活かしているようである。

日常生活では、自らの推し活について概ね周囲から受け入れられているようではあるものの、同級生や保護者から否定的な言葉を受けた経験がある者は多い。否定的な言葉の影響としては、推しをもっと推すあるいは気にしないという者と、気にして態度を変えた者とに分かれた。

ゼミで印象に残ったことやゼミを通しての変化では、他の生徒の推し活について知り、自分とは異なる考え方や価値観を知ったことについて、多くの者が書いていた。校外学習での見学やオタク用語の収集等、ゼミでの活動自体が印象に残ったという者もいた。また、自己理解や自己肯定につながったことがうかがわれる回答も見られた。

## 4. 考察とまとめ

本稿では、推し活を行う中学生にとっての心理的安全性が得られるサンクチュアリのあり方の一つとして、総合的な学習の時間における「推しごとゼミ」を取り上げ、検討した。

このゼミの名称では、「オタク」でなく「推し」という表現が使われている。

「推し」という表現は2010年ごろまでは主に一部のアイドルファンが使うものであったが、2011年に「推しメン」という語が広く知られるようになった。しかし、「推し」は文脈によって、推す行為、推す主体、推す客体とい

うように意味が変わる語であり、一般にはあまり使い勝手のよい表現とは言えなかった。しかし、2021年ごろから「推し活」という語が広く使われるようになり、この語は明らかに「推す活動」を意味する語であることから、使い勝手の問題は解消された。また、従来、推す行為の主体は「オタク」と自称されていたが、「推し活」の主体は必ずしも「オタク」と呼ばれず、「オタク」という語の否定的あるいは自虐的な意味合いは「推し活」には感じられにくくなっている。

こうした状況の変化があった中、「推しごとゼミ」では「推し活」とほぼ同義の「推しごと」がゼミ名称に掲げられた。「推しごと」という名称には、「オタク」ほどの否定的な印象はない一方で、「推し活」よりはややマニアックな印象がある。このため、推し活をしている中学生にとっては、推し活をしている自分が否定されることなく受け入れられ、推し活という共通の関心事をもつ者たちの集まりという印象をもちやすいものであったと考えられる。

「推しごとゼミ」においては、序盤から教師や生徒の発言の中で、多様性を尊重するという姿勢が繰り返し語られていた。日常生活で推し活について生徒が否定されることは必ずしも多くないものの、否定的な言葉を受けた経験のある生徒は多い。一般にはオタクのコミュニティでは利己主義や排他主義による問題が想定されるものの、「推しごとゼミ」では多様性を尊重することが強調されており、利己主義や排他主義が問題となることはなかった。

「推しごとゼミ」において、生徒たちは順調に探究活動を進めることができた。このことは、もともと自分が大切にしている推し活に関するテーマを探究したことの影響

が大きいと考えられる。自分が大切にできるテーマゆえに探究活動が意欲的に進められやすく、このため探究活動を通して関係する諸能力が高められたという実感を生徒は得られやすかったものと考えられる。

以上のように、今回の「推しごとゼミ」は、推し活をする中学生たちにとってのサンクチュアリとして、推し活への攻撃から生徒たちを守り、意欲的に学習を進めて関連する能力を伸ばすことができる授業デザインの一つのモデルとなっていたと言することができる。このようなモデルを示すことができたことは、本研究の重要な成果である。

ただし、今回の「推しごとゼミ」は、そもそも推し活をしており、そのことについて周囲に知られることを受け入れた生徒たちだけが参加していたことに注意が必要である。「推しごとゼミ」を選択した生徒は、そのことを周囲に知られ、探究発表会においては保護者が自らの発表を見たり聞いたりすることとなる。このため、そもそも推し活をしていない生徒や、推し活をしていてもそのことを周囲に知られたくない生徒にとっては、今回の「推しごとゼミ」に参加することは困難であったはずだ。こうしたことを踏まえば、「推しごとゼミ」のような場への参加が困難な学習者も参加できるサンクチュアリがどのように実現できるかという課題は残っていることとなる。この課題を解明するには、今回のような選択授業でなく、日常の各教科の授業等において、推し活をしている者が攻撃されたり排除されたりせずに、推し活をしていることを活かして能力を高められるような授業デザインの検討が求められる。

<sup>1</sup> 本稿は、日本デジタルゲーム学会第15回年次大会（2025年2月21日～23日、松山大学にて開催）での発表内容をもとにしている。

<sup>2</sup> 「コトバンク」における「デジタル大辞泉」の説明より、用例を除いて引用した。

<https://kotobank.jp/word/推す-452584#w-452584>（2024年12月20日最終確認）

<sup>3</sup> 1999年に開設されたインターネット匿名掲示板。現在の名称は「5ちゃんねる」。

<sup>4</sup> <https://kakolog.jp>（2024年12月25日最終確認）

<sup>5</sup> 旧Twitter。2006年に開設されたSNS。

<sup>6</sup> 朝日新聞 1892年9月3日

<sup>7</sup> 朝日新聞 1896年11月29日

<sup>8</sup> 読売新聞 1995年7月25日「[青春パフォーマンス] 遊びが変わる夏の街 ビル街にレジャースポット」

<sup>9</sup> 当時、「モーニング娘。」に在籍していた藤本美貴さんのこと。

<sup>10</sup> アップフロントグループによる女性アイドルを中心としたエンターテインメントプロジェクト。歴代、「モーニング娘。」をはじめ、Berryz工房、C-ute、アンジュルムといったグループが所属してきた。

<sup>11</sup> Xの前身のTwitterのサービス開始は2006年7月15日である。2006年に限定して検索しても「推し」に関する表現はヒットしなかったが、現在のXの検索機能がサービス開始当初の投稿をどこまで対象としているかが不明であるので、2006年当時にTwitterで「推し」という語が含まれる投稿がなかったかどうかを決めることはできない。

<sup>12</sup> バンダイナムコエンターテインメントのメディアミックス作品『アイドルマスター』シリーズのことと思われる。

<sup>13</sup> アイドルマスターシリーズに登場するキャラクターである「水瀬伊織」のことと思われる。

<sup>14</sup> 2006年から2014年まで在籍したAKB48の元メンバー。

<sup>15</sup> AKB48や派生グループのSDN48のメンバーであった浦野一美さんの愛称が「シンディ」であったことから、浦野一美さんのことと思われる。

<sup>16</sup> 2005年に発足した女性アイドルグループ。東京の秋葉原に専用劇場をもち、この劇場での公演を中心に活動を始めた。

<sup>17</sup> 読みは「キュート」。2005年から2017年まで活動した日本の女性アイドルグループ。「ハロー！プロジェクト」に所属。

<sup>18</sup> 当時のジャニーズ事務所所属のグループやタレントの総称。

<sup>19</sup> 当時、ジャニーズ事務所所属のアイドルグループ「嵐」のメンバーであった相葉雅紀さんのことだと考えられる。

<sup>20</sup> 朝日新聞 2011年6月5日「アイドル戦国時代 『がんばる』の共同体として」

<sup>21</sup> 2009年から2018年にかけて毎年1回、AKB48のシングル表題曲を担当するメンバーをファンによる投票によって決定する「選抜総選挙」が行われていた。2011年に実施されたのは第3回の「選抜総選挙」であり、ここで上位に入ったAKB48と関連グループのメンバー16名が、22枚目のシングルの表題曲「フライングゲット」を担当した。この年の「選抜総選挙」では前田敦子さんと大島優子さんの1位争い等が話題になり、投票総数は前年から大きく伸び、AKB48及び「選抜総選挙」が広く注目を集めた。

- 22 朝日新聞 2019年8月22日夕刊、「車折神社 推しに会える? 芸能人の聖地 【大阪】」
- 23 初回は2021年4月28日。
- 24 朝日新聞記者の金澤は「もともと『推し』という言葉が使われはじめたのは、1980年代のアイドルブームだったといわれています」と述べているが、裏付けは確認できない。金澤ひかり「オタクに偏見ないZ世代、『推し』はコミュニケーションツールへ」(withnews, 2021年6月4日)  
<https://withnews.jp/article/f0210604005qq0000000000000000W07n10801qq000023126A> (2024年12月22日最終確認)
- 25 2002年から2006年くらい時点では、「事務所推し」と言えば事務所が推していること、「藤本推し」であれば事務所等が藤本美貴さんを推していることを意味し、「推し」は動作・作用を意味していた。その後、「藤本推し」は、ファンが藤本美貴さんを応援しているという動作・作用や、藤本美貴さんを推しているファンという動作・作用の主体を意味するようになった。
- 26 「ゆきりん」と「チュウ」は、当時のAKB48のメンバーの柏木由紀さんと河西智美さんを指すと考えられる。
- 27 アイドルオタクのこと。
- 28 バーチャル YouTuber から来た語で、自身がバーチャルなキャラクターとなって YouTube 等のプラットフォームで動画配信を行う者を指す。
- 29 推し活の文脈では、動画配信プラットフォームや SNS で歌を歌う活動をしている人のこと。主に、既存の楽曲をカバーし、自分の歌声を録音して動画として配信する。顔を出さずにイラストやアバターを使用することが多く、匿名性が高い。
- 30 以下を参照。  
本間勇輝・若狭谷笑未「中高年も4人に1人は『推し』がいる時代 2024年『推し活』の実態を調査データから紐解く」(VD Digest+ 2024年3月18日公開、2024年6月20日更新)  
<https://www.videor.co.jp/digestplus/article/media240318.html> (2024年12月22日最終確認)
- AduerTimes「少し不完全な方が推せる? 企業やブランドが『推し』は29% 読売広告社が調査」(2021年12月6日)  
<https://www.advertimes.com/20211206/article370588/> (2024年12月22日最終確認)
- 31 第3回と第4回は第一著者が授業に参加できなかったため、一部の記録はあるもののここでは取り上げないこととした。
- 32 第一著者は2023年3月まで附属中学校長を兼務していた。
- 33 アイドルなどの「推し」について、他者が同じ対象を推していることを好まない、あるいは拒絶する態度や行動のこと。学会発表の際に指摘を受けたが、同担拒否というあり方を肯定しつつ、そのことによって他者を傷つけないよう促すという方法もありえた。
- 34 オタク活動用のアカウントのこと。「垢」はアカウントを意味するネット用語。
- 35 推し活の文脈では、対象である「推し」に直接触れられる場所や機会を指す。典型的には、コンサートやライブ、「ファンミーティング」と呼ばれる交流イベント、握手会やサイン会等が該当する。
- 36 推し活の文脈では、ファンが「推し」に関連する場所を訪れる活動を指す。具体的な場所としては、アニメーションや漫画の作品の舞台となった場所、映画やミュージックビデオの撮影地、推しの出身地、推しに関連するミュージアム等がある。
- 37 主に K-POP ファンの間でのグッズやアイテムの交換。
- 38 中国のゲーム会社 miHoYo が開発したアクション型のロール・プレイング・ゲーム。
- 39 堀越耕平作の漫画作品。アニメーション化もされている。
- 40 青山剛昌作の漫画作品。アニメーション化もされている。
- 41 推し活の文脈において、2次元は平面上に描かれるキャラクターや作品、3次元は現実世界の人物等の物理的存在を指し、2.5次元は両者の中間的存在を表す。
- 42 アクリルスタンドの略。キャラクター等が印刷されたアクリル製のスタンド型グッズ。デスクや壁に飾って楽しむほか、イベント等に持って行ってその場所で写真を撮ったりする楽しみ方もなされている。
- 43 自分は3次元空間にいて、アニメやゲームなどでの「推し」

は2次元空間にいてということ。

- 44 漫画、アニメーション、ゲーム関連グッズの専門店チェーン。
- 45 「痛いバッグ」の略。自分の推しを応援するためにカスタマイズされたバッグのことで、缶バッジやぬいぐるみといったグッズを大量に取り付けるなどした非常に目立つデザインが特徴。派手さの度が過ぎることについて自虐的な表現でありながら、自分が好きなことを堂々と表現しているという意味合いが感じられる表現でもありと考えられる。
- 46 現場に行かず、自宅で推し活を行うこと。具体的には、配信視聴、グッズ収集、SNS の利用、音楽や映像の鑑賞等の活動が考えられる。
- 47 推し活の文脈においては、推しを他者に紹介し、その魅力を広める行為。
- 48 推し活の文脈においては、特定の推しあるいは推しのカテゴリを共有する集団あるいはコミュニティのこと。
- 49 推しに対して「本気で恋をすること」を示す。似た言葉に「リアコ」(「リアルに恋をすること」の意)がある。
- 50 トレーディングカードの略で、収集や交換を目的としたカードのこと。今回の発表では、自分の界隈にトレカがないことを不満に思っている者がいることがアンケートで確認されたことから、トレカが流行するという予測がなされた。
- 51 アイドルの応援でよく使われているペンライトのミニ版として提案された。低予算でバッグにつけられるグッズが人気であることや、写真映えするグッズが人気であることから、作られれば流行すると予測された。

#### 引用文献

- 沈晨 (2013) 「日本語連用形名詞の自立性の段階について」、『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』
- Edmondson, A. C., & Lei, Z. (2014) Psychological Safety: The History, Renaissance, and Future of an interpersonal Construct. *Annual Review of Organizational Psychology and Organizational Behavior*, 1, pp.23-43.
- 江藤裕之・岸利江子・岩崎朗子・坂本ちより・頭川典子・青木三恵子・久保田智恵・杉浦絹子・八尋道子 (2002) 「医療者間で使われるドイツ語隠語の造語法に関する考察」、長野県看護大学紀要、第4巻、pp.31-39
- 藤川大祐・渡邊文枝・見館好隆・小野憲史 (2022) 『「オタク」概念の意味論的検討』、千葉大学教育学部研究紀要、第70巻、pp.1-6
- 藤川大祐・牧野太輝・渡邊文枝・見館好隆・小野憲史・小牧瞳 (2024) 「オタク力が発揮されやすい教室デザインの検討—サンクチュアリー及び文化変容の観点から—」、千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書、386、1-10
- 廣瀬涼 (2022) 「オタクのコミュニティは本当にオタクにとってのサンクチュアリー (保護区) なのか。—利己主義と排他主義が生むオタクのコミュニティの実態」、基礎研レポート (ニッセイ基礎研究所)  
<https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=71048?pno=2&site=nli> (2024年12月24日最終確認)
- 西尾寅弥 (2004) 「連用形名詞の性質について—特に人工物を指示する場合—」、大妻国文、第35巻、pp.83-94
- 見館好隆・小野憲史・渡邊文枝・藤川大祐 (2021) 「社会で働く上で求められる『オタク力』の可能性の検討」、日本教育工学会第39回全国大会講演論文集、pp.127-128
- 大石百華 (2023) 『「オタク」と『ファン』の意味変容からみる『推し』概念の拡張: 尺度研究における構成概念の異同と変遷に着目した考察』、九州大学教育社会学研究集録、第26巻、pp.37-61
- 小野憲史・見館好隆・渡邊文枝・藤川大祐 (2024) 「ゲーム産業で働く上で求められる『オタク力』の可能性の検討—ゲーム開発会社での調査を中心に—」、デジタルゲーム学研究、第17巻1号、pp.13-22
- 渡邊文枝・見館好隆・藤川大祐 (2021) 「オタク力尺度の作成に向けて」、日本教育工学会第38回全国大会講演論文集、pp.301-302